

The Human Factor 再読

Sarah の物語を中心に

藤田 眞弓

はじめに

Chimamanda Ngozi Adichie の *Americanah* (2013)には英語圏作家の言及があり、中でも Graham Greene の名前は作品タイトルと合わせて4回もプロット上重要な箇所が登場する。また、Adichie はインタビューで Greene を好きな作家に挙げており、*The Heart of the Matter* (1948)は自分が考える「完璧な小説」に近いと述べている。

その Greene は1935年に初めてリベリアを旅行し、その後MI6の諜報員としてのシエラレオネ滞在と、2回のアフリカ旅行を経験している。アフリカに魅せられた Greene は、アフリカ西海岸のイギリス植民地が舞台の作品(*The Heart of the Matter*)やアフリカ旅行記(*Journey Without Maps* [1936]、*In Search of a Character: Two African Journals* [1961])を執筆している。

Adichie が作品やインタビューで Greene に言及したことと、Greene のアフリカ経験とは関係は無いのかも知れないが、少なくとも発表者には示唆に富む事実であった。

Adichie の描くヒロインたちはアメリカ社会で移民の現実と直面しながらも、たくましく生きる女性として描かれている。*Americanah*、“The Arrangers of Marriage”(2009)、“The Thing Around Your Neck”(2009)などはオープンエンディングであるが、ヒロインが自立し、新たな人生を歩み出すことを読者に予感させる。

Greene の場合はどうだろうか。本発表では *The Human Factor* (1978)を中心に Greene 作品で異国、異文化の中で生きる女性がどのように描かれているのかを考察する。

Greene と「アフリカ」

Greene にとって作家としての原体験とも呼べる1935年の初めてのリベリア旅行の旅行記は翌年 *Journey Without Maps* として出版された。この旅を通して、Greene は「第二の改宗」を経験したと述べているが、本発表では、旅の同伴者 Barbara Greene に注目する。

Greene の *Journey Without Maps* に Barbara はほとんど登場しないこととは対照的に Barbara の旅行記 *Land Benighted* (1938)は Greene への言及であふれている。Greene と Barbara の旅行記における記述はあらゆる点において矛盾しているのだが、ここでは Barbara の旅行記を *Journey Without Maps* の記述の誤りを証明するものとしてではなく、お互いに補完し合うテキストとして扱いたい。

ジギズタウンに向かう道中で Greene は熱病に冒され生死を彷徨う経験をする。旅の全ての責任は自分にあると自負していた Greene だが、あまりの疲労感からこれ以降の問題の対処を Barbara に託すことにする。翌朝、目覚めると嵐と共に熱も下がり、危機的状況を脱した経験を Greene は「第二の改宗」として語っている。

Greene がこの経験を通して「生への激しい関心」(206)を発見したことを強調している一方で、Barbara は Greene の死のイメージに取り憑かれていた。Greene を寝かしつけた後、Barbara の頭から離れないのは、Greene が死ぬであろうこと、カトリックの彼をどのように葬るか、そして Greene が死んだら蠟燭を燃やさなくてはならないということであった。峠を越した Greene の姿も、Barbara には「死神がニヤッと笑いかけている」(176)ようにしか見えない。Barbara にとって重要なのは、Greene が「第二の改宗」を経験したことではなく、Greene が死にかけたことであり、それにより、残りの旅程の management を彼女がしたことである。「触ると痛い歯をその後も痛みがあるのかどうか、舌で触って確かめるように」(180)、Barbara は Greene や旅の同行者たちの様子を伺うのだが、ここで注目したいのは Greene が体調を崩してから以降、それまでは Greene が行っていた一行の先頭を、Barbara が行くことになることである。

このように、それまでイニシアチブを取っていた男性が身体的に、精神的に弱って行く一方で、女性がその役割を担うという状況が実は *The Human Factor* にも見られるのである。

Louis Scobie の場合：The Heart of the Matter

Scobie の妻 Louise は英国から夫の赴任地を訪れている間に戦争が勃発したため帰国出来ずに西アフリカに留まっている。Louise は Scobie にこの土地には我慢が出来ないと訴え、友人たちがいる南アフリカに移住することを切望する。Scobie は金を工面して、彼女を南アフリカに行かせてやる。南アフリカで Scobie と Helen の関係を聞いた Louise は Scobie の合流を待たず、西アフリカに戻って来る。

南アフリカから帰って来た Louise の姿は実に「何もかも変わった」(206)ように Scobie の目に映る。南アフリカに行くまでの彼女は Scobie に旅費の無心をし、旅の手筈も彼任せであったのが、Scobie が体調不良を理

由に昇進どころか、退職することを決意した時、Louise は英国の Kent に住むことを望むが、Scobie の年金がそれを叶えるだけの余裕がなかった場合は、自分が働いて何とかすると申し出る。南アフリカでの経験が Louise を変えたのだろうか。しかしながら、*Journey Without Maps* の Barbara 不在と同様に、Loise が南アフリカに滞在中の描写がテキストには一切ない上に *The Heart of the Matter* のテキストがもっぱら Scobie の視点から語られ、Helen よりも Louise に不利に働いているが故に（山形、『グレアム・グリーンの文学世界』239）、Adichie のヒロインの行く末を読者が慮るようには、*The Heart of the Matter* の読者が Loise のこれからを想像するのは困難なのではないだろうか。

Sarah Castle の場合：The Human Factor

Castle がモスクワへ逃亡した後、息子と共に英国に残された Sarah を描く Part6 は Sarah が Maurice の元を去る場面から始まる。タクシーの中で後ろを振り返った Sarah の目には Maurice は入水したように見え、もう彼を取り戻すことは不可能であると感じる。

愛する人が自分の「国」だと言う表現が本作では何度か出てくるが、Maurice という「国」を喪失した Sarah は Part6 の冒頭で早くも、新しい環境に馴染めず、この状況から抜け出したいと思っている。これ以降 Sarah は Sam と二人だけの新しい環境の構築に向け、Maurice を象徴的に失って行く。「象徴的な Maurice の喪失」の表象には Maurice の「死」のイメージと、Maurice の「子供返り」の二つの型がある。Part6 で Maurice に「死」や「子供」のイメージが付与されていることが、テキストにはどのような効果を与えているのだろうか。

Part6 では Maurice の「男らしさ」が「剥がれて」行く。これと反比例するように語られているのがサラの逞しさである。敵と思える Doctor Percival に一人で会いに行く場面は、テキストでは直接語られることのない彼女の諜報員時代の姿を、読者が鮮明に思い描くことを可能にする。覚悟を決めて臨んだ Percival との会談であったが、彼に脅されていると感じた Sarah は彼を残して一人店を出るが、彼女はその脅しに屈することはない。この姿が、彼女が Percival に言い放った「サムは私の息子です。私はどこへでも好きなところに彼を連れて行きます。モスクワだろうがディンブクトゥへでも」(240)という言葉を、読者が信頼するに足るものにしていく。

最後の電話の場面での Maurice の声は、Sarah には「聞いたこともない声」で「春が来るかどうか信じられない老人の声」(259)のように聞こえる。Maurice は、Sarah が英国には友達が居ないことなど慮らず、自分にはモスクワに友人がおり、現地での暮らしに満足していると述べる。勿論 Maurice は Sarah の手前、このように発言している。Sarah はそれを察したのか、希望を捨てないように Maurice を元気づけるが、Sarah が Maurice から励ましの言葉を得ることなく電話回線は切れてしまう。この場面の直前に、Sarah は「ボトムリー氏に英国を脱出する手助けを頼んだら彼は何と言うだろう」(258)と考えていた。これは Maurice を追ってモスクワに行くことを示唆していると思われるが、Sarah が Percival に言い放った言葉を思い出すと、それと同程度に彼女が息子を連れて二人で英国以外の地で新しい人生を歩むことを考えていると解釈できる。Adichie の描くヒロインたちたちが自立し、新たな人生を歩み出すことを読者に予感させるのと同様に。

まとめ

Greene 作品に登場する女性たちは「男性の物語」の背景に過ぎないという評価がなされてきたが、*The Human Factor* のテキストが閉じた後にも読者が Sarah の今後を想像する余韻を残している事実より、Sarah は決して単なる「男性の物語」の背景として描かれているわけではないと言えよう。

Tim Butcher は「アフリカ体験とスパイ経験 (MI6 勤務) が現在我々の知る作家 Graham Greene を作った」とまで述べている。「アフリカ」と「スパイ」、その両方を作品の主要な要素として含んでいるのがこの *The Human Factor* であることを鑑みると、本作を再読、再評価することには大きな意義があるのではないだろうか。

主要参考文献

Adichie, Chimamanda Ngozi. *Americanah*. 2013. London: 4th Estate, 2017.

Butcher, Tim. "Graham Greene and South Africa." *Bulletin of the National Library of South Africa*, vol.72, no. 1, June 2018, pp. 81-88.

Greene, Barbara. *Too Late to Turn Back.: Barbara and Graham Greene in Liberia*. First published as *Land Benighted*, 1938. London: Settle and Bendall, 1981.

Greene, Graham. *The Heart of the Matter*. 1971. London: Vintage, 2001.

---. *The Human Factor*. 1978. London: Vintage, 2019.

---. *In Search of Character: Two African Journals*. 1961. London: Vintage, 2000.

---. *Journey Without Maps*. 1936. London: Penguin, 2006.

山形和美. 『グレアム・グリーン入門-特異な人間性と迫力に満ちた作品世界』. 東京: 彩流社, 2010.

---. 『グレアム・グリーン文学世界』. 東京: 研究社, 1993.